●◆しゃばのしがらみを、仏の願いの中でいただこう◆●

仏の願い

平成２１年 西雲寺だより　冬号（１４号）

当山 御正忌報恩講のご案内

11月28日(土)～30日(月)

28日お逮夜(2時)
お初夜(7時)（武周お講）
29日お日中(10時)
大逮夜(2時)（御伝鈔）
お初夜(7時)（御伝鈔）
30日満日中(10時)

法話　福井　野世信水師（29日より）

お誘い合わせの上
ご参詣下さいますようご案内いたします

御本山（ごほんざん） 御正忌（ごしょうき） 報恩講（ほうおんこう）に

日帰り参拝

いたしましょう！

11月27日（金）です

詳しくは裏表紙(6頁)をご覧下さい

親鸞聖人のご生涯

愚禿釈親鸞の名告り

赦免（しゃめん）

越後に配流された親鸞聖人は、聖人が「五年の居諸（月日）を経たりき」としるすように流人として五年の歳月を過ごしたのち、建歴元年（一二一一年、三十九歳）に師、法然上人とともに罪が許されます。そして翌年十月、法然上人は八十歳で世を去られます。聖人はその悲報を聞いてどれほど落胆されたことでしょう。もう一度よき師、法然上人にお会いしたい、そしてお念仏の教えを確認し、自分の進むべき道を問い尋ねようとされたと思われます。しかし二度とお会いすることはできなかったのです。

承元（じょうげん）の法難に連座して流罪に処せられたとき、聖人は強制された「藤井善信」という罪名を受け取ることを拒否し、敢えて「禿」を姓とする者として越後におもむきました。その聖人がいつしか「禿」に「愚」を添えて「愚禿（ぐとく）」と名のり、やがて流罪を許された頃より「愚禿釈親鸞」と名のる人になっていったのです。聖人が自分を「愚禿釈親鸞」と名のるようになった時こそ、われらの宗祖としての誕生のときであります。この名のりには流罪をとおして、田舎の人々と共に生活をするなかで、いよいよ深く本願を聞思（もんし）し、人間としての愚かさにめざめていかれた自覚の世界があらわされているのです。

愚禿

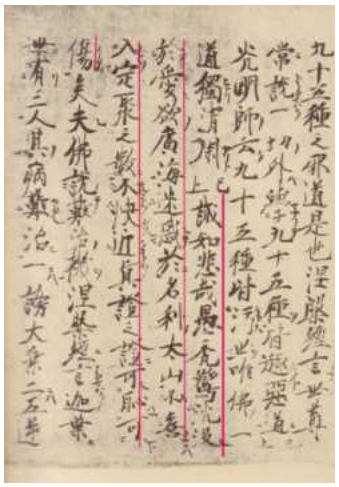
愚禿の自覚を深めたのは、越後の地で共に生活をした田舎の人々のすがたではなかったでしょうか。汗にまみれ、ただ生きんがために働く人々、また業縁によって罪を犯かなければ生きていけない人々、しかしそれらの人々の生きざまのなかに生きることのたくましさ、いのちのまことのすがたをみていかれたのです。それと共に宗祖は越後において妻帯をし、子供をもうけられました。家庭というのは、家族のつながりのなかで温かさもあると同時に、人間業の愚かさをさらけ出す場でもあります。家庭生活を営むなかで、いよいよ愚かさを実感していかれたのです。

ご開山と名づけられた方は何人もおられますが、公に妻帯をされたのは親鸞聖人一人であります。法然上人も生涯妻帯せず、戒をまもり清僧のままで一生を過ごされました。聖人が妻帯をし、お念仏の道を歩まれたということは、肉食妻帯をしなければ生きていけないわれわれ凡夫がそのままくわれる、万人が平等にすくわれる仏道が明らかになったということです。もし聖人が妻帯をしなければわれわれが救われる道は閉ざされたままでしょう。宗祖は愚禿としてのわが身の愚かさを次のように告白されています。

凡夫というは、無明（むみょう）煩悩われらが身にみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず

（一念多念文意）

悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没（ちんもつ）し名利（みょうり）の大山（たいせん）に迷惑して、定聚（じょうじゅ）の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快（たの）しまざることを、恥ずべし、傷むべしと（教行信証　信巻）



親鸞聖人の直筆
（国宝・板東本）
赤線が右の引用箇所

親鸞の名告（なの）り

愚禿と名のっておられた宗祖は、流罪が許された頃から「愚禿釈親鸞」と名のるようになりました。この名のりには「大無量寿経」との深い出遇いがあったのです。勿論宗祖は吉水時代から「大無量寿経」は学んでおられました。しかし流罪をご縁として田舎の人々と共に生活するなかで、「大無量寿経」の説かれる本願のおこころに新たにめざめていかれたのです。その「大無量寿経」のおこころをいただいていくよき師となったのが、七高僧のなかの天親菩薩と曇鸞大師であったのです。「正信偈」のなかに出てきますが、天親菩薩は「大無量寿経」の註釈書である「浄土論」をお造りになり、更に曇鸞大師はその「浄土論」を註釈して「浄土論註」をお造りになられたのです。

このお二人の註釈によって親鸞聖人は「大無量寿経」の表わす精神に深くふれていくことができたのです。それによって天親菩薩の「親」と曇鸞大師の「鸞」の一字をそれぞれいただかれて「親鸞」と名のられたのです。

親鸞聖人が「大無量寿経」のなかで特に感銘をもって読まれたのが次のご文でした。

如来、無蓋(むがい)の大悲をもって三界を矜哀(こうあい)したもう。世に出興する所以(ゆえ)は、道教を光闡(こうせん)して、群萌(ぐんもう)を拯(すく)い、恵むに真実の利をもってせんと欲してなり。

釈尊が世に出、教えを説かれたのは「群萌を拯う」こと一つであったのか、また如来の本願はこの群萌をすくわんがために起されたのか、宗祖は深い感動とともにこの「大無量寿経」の一文をいただかれたのでした。群萌とは雑草という意味であります。あたかも大地に根をはって群生する雑草が、春の訪れと共に、太陽に向かって一斉に芽生えていくように、泥まみれになってこの世の底辺を生き、この世を生きる重さを一身に背負って苦悩しながらも、なお光を求めてやまない人間の生きざまを表わす言葉であります。このような群萌こそ如来の本願の機であり、本願の教えによらなければ、どこにも真実に救われる道のないもの、群萌とはそのような人間をあらわす言葉であります。

われらの世界

親鸞聖人は如来の大悲に群萌として見い出され、ご本願には「十方の衆生」と呼ばれているわが身にめざめた世界を、「われら」と表現されました。

りょうし、あき人、さまざまのものは、
みな、いし、かわら、つぶてのごとく
なるわれらなり（唯信鈔文意）

私たちは本願の呼びかけにめざめなければ、「われ」か「われわれ」の狭い世界を出ることはありません。「十方衆生」と呼びかけている如来のご本願に呼びさまされて初めて、生きとし生けるもの、迷えるものすべてと連なり、共にすくわれていく「われら」の世界に出させていただくのです。親鸞聖人は「愚痴きわまりなきいなかの人々」のなかに自分を見い出しそれらの人々と共に「われら」として「御同行御同朋(おんどうぎょうおんどうぼう)としてお念仏申して、如来の大悲のなかをお浄土への道を歩んでいかれたのです。

越後の七不思議

親鸞聖人が越後でいなかの人々とよばれる民衆と共に生活をされたのは、流罪中の五年間と関東に移住するまでの二年間、この七年間宗祖は如来の大悲にめざめた群萌のひとりとして、本願に呼びさまされた「われら」として民衆と苦楽を共にしながら念仏申すいのちの尊さを説かれていかれました。そうしたなかで聖人亡きあと、聖人の教化を慕って民衆のなかに越後の七不思議の伝承がうまれました。

越後の七不思議というのは次の通りです。

一、逆さ竹（西方寺）
二、焼鮒(やきふな)（誓慶寺）
三、八房梅（梅護寺）
四、数珠掛桜（梅護寺）
五、繋榧(つなぎがや)（了玄寺）
六、三度栗（孝順寺）
七、片葉の芦（居多ヶ浜）

これらの伝承は何を意味しているのでしょうか。たとえば、梅干の種、焼栗、焼榧が宗祖の手によって大地におちるとき、たちまち根芽を生じ、思いがけない枝葉をつけ、花や実をもたらしたと言い伝えられています。これは「いし、かわら、つぶてのごとくなるわれら」といわれるいなかの人々が、群萌として大悲の光の中によみがえって、それぞれがいのちの尊さにめざめて立ち上がって生きていったすがたを表わしたものと思われます。（住職）

寄　稿

先日、母の五十回忌を、寺の若様をお迎えして執り行いました。母は十三人もの子を産み、八人を成人までそだて、六十八才で他界しました。当時は、今の温暖化と違って、大雪の師走でした。二米もの雪が積もり、バスは不通、三日間停電で、何里もの道を歩いて駆けつけて下さる人も在りました。手伝い下さった人も大変であったことを思い出す。

その翌年、私の息子が産れた。母の生まれ変わりのようにも感じた。その息子が、私の体が不自由な為、母の法事を仕切っているその姿を見て、何とも言いがたい感がする。

それはともかく、こうして家族、存命の姉弟五人が法事に集う事が出き、母に感謝したい。母を偲んで読経の後、種々なつかしい昔のことを思い出し語り合い、たのしいひとときを過ごしました。

法事の翌日、一通の手紙がわたし宛に来た。わたしの初孫の結婚式の招待状である。遠く関東で暮らす孫が嫁をもらうのだ。二人は今夏、我が家にも来て会食したが、お相手は何と気が利く良いむすめさんだ。現代はこのような女性がいるのだと感心する程だ。私の気分も明かるくなる。ただ都会での結婚式となるといかんせん体力に自信が持てず、今回は遠慮することにした。ただ二人の幸福を願う気持はだれにも負けない。私もしばらくはがんばって、曾孫を見る迄は生きていたい。愛する皆さまに感謝。

合掌

宿堂町　山本 徹

☆　報恩講がつとまりました　☆

神田師

奥田師

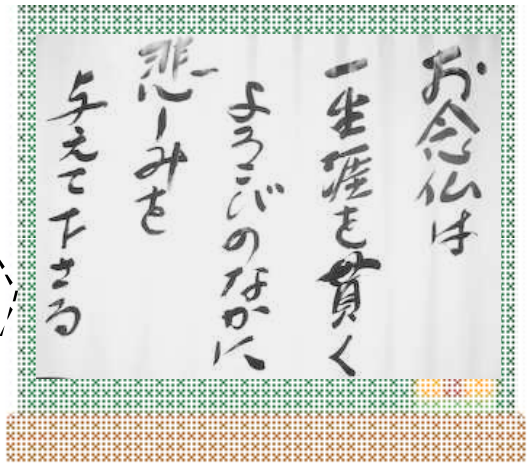
報恩講のなかびの大逮夜を盛り上げてくれているコーラス、気がつけば15年以上の歴史があります。メンバーは武周のご婦人方が中心ですが、近年は大学生や、チビっ子さんなど、心強い助っ人が加わってくれています。

そして、さらに心強いのが…ご参拝の方々の歌声です！一人一人はつぶやきでも、１００人集まるとかなりの迫力となって、歌っている私たちに聞こえてくるんですよ。特に今年は恩徳讃の旧節に初チャレンジしたので、実は自信がなかったのですが、逆に皆さんの声を頼りに歌うことができました。一緒に歌うことを通して、皆さんと心が通い合う喜びを感じました。

あらゆる場面、それぞれの形で、皆さんが報恩講を支えてくださっていることが本当に心強いです。ありがとうございました。

（護城美和子）

山門掲示板



私たちには如来の誓い、願いがかけられている。その願いは大悲のおこころより起されたものである。一切衆生が苦悩し、虚しさのなかに流転していくすがたを見い出して、深い悲しみとともに、その苦悩を引き受けて立ち上がって下さったのである。私たちは如来さまの大いなる悲しみ、大悲のなかを生きているのである。しかし悲しいかな私たちはまことに鈍感で我身のあり方を悲しむことも、如来の大悲にめざめることもないのである。しかし私たちは人生につまづき、地獄のそこにつき落されたとき、本当に私のあり方を悲しみ引き受けてともに歩んでいて下さっている存在を見い出したとき、すくわれ生きていけるのである。私たちはお念仏のまことにめざめたよろこびは一生を貫くものであるけれども、その根底には常に如来の大悲に背いてしか生きられない深い悲しみがあるのである。（住職）

先輩の感動をたずねて

こないだ、秋廻りの報恩講にうかがったお宅で、念仏の教えの話がでました。ご主人は、念仏の先輩から「自分を全否定された」と、大変ご立腹でした。

全く同感、一個人から全否定されるなど受け入れられない事です。私の人生を全部否定できるなんて、あなたはどこのどなたです？みたいな…。

しかし、念仏のお育て（正信偈でいう光）の中で生活するうち、私は１００％「自害害彼（自らを害し彼をも害す）」やから、「自利利他円満」というアミダの願いを念じなあかんのやと感動されてくるのです。

「あんたの正体は、欲（清浄の逆）と、怒り（歓喜の逆）と自分すら見えない無知（智慧の逆）なんやざ」この耳の痛い呼びかけは、対面する先輩の背後に連なる無数の先人（アミダ）の声なき声じゃないでしょうか。

言う側の先輩も、「私も全否定を受け入れられんかったのに、知らず知らずお育て（アミダの光）に預かりまして、…」ですよね。（編者）

清浄歓喜智慧光（しょうじょうかんぎちえこう）
不断難思無称光（ふだんなんしむしょうこう）
親鸞作『正信念仏偈』より

読み方―清浄(光)・歓喜(光)・智慧光、不断(光)・難思(光)、無称光(を放つ)

※不断―絶えないこと

※難思―思い浮かべるのが難しいこと。つまり僕らの思考基準の延長上ではないこと。

※無称―称は、てんびんではかるの意。闇を見通す明るさは、どんな光もつり合わない。

本山御正忌報恩講　日帰り参拝　ご案内

（武生の光善寺さんとの合同企画）

およその日程（11/27 金）

6:00 西雲寺発→6:20 西安居地区→6:40 坪谷→7:00 鯖江市舟津→
7:10 武生高校前→7:20 武生インター　(高速道路では適宜休憩いたしますのでご安心を)→10:00 京都東インター
10:30 佛光寺本廟着　全員でおつとめしましょう。

11:30 本廟発→佛光寺本山に向かいます
到着後おときをよばれます。その後は自由に休憩。
14:00 大逮夜(雅楽・文類正信偈・門主代務恵照様御親言・復演布教)
16:30 本山発→　17:00 京都東インター
→高速道路(軽食や飲み物を用意いたします。車中にぎやかに親睦を深めながら帰りましょう！)

20:00 武生インター着→武生高校前→鯖江市舟津→
20:40 坪谷着→ 21:00 西安居着→ 21:20 西雲寺着予定

食事　朝食…恐縮ですが各自でご用意願います
昼食…本山(白書院)でおときをよばれます
夕食…軽いものですが車中食を用意いたします

費用　10,000 円(おとき料・本廟本山懇志を含みます)当日で結構です

持ち物　念珠、同朋章(わげさ)、お経本(旧来の赤い本)、雨具、座椅子

※途中で乗り降りされたい方は、遠慮なくご相談下さい。
※光善寺さんから乗車することも可能です。ご相談下さい。

**いっぺんいっぺんがおさめと思い
私もお参りさせてもらいます**

（お申し込みは 11 月 20 日までに西雲寺へ ）

発　行
真宗仏光寺派 専念山 西雲寺（さいうんじ）
住職　護城一寿
筆頭総代　鈴木春夫
編集責任者　護城一哉
〒910-3523　福井市武周町５－２
電話　0776-97-2138
メール　kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
ホームページ　http://arukou.net/

次世代の方、分家された方に！
お手元に２部届いた時には、ぜひご活用下さい。

みなさんの声 大募集！
原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。